

令和2年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）

「持続可能で良質かつ適切な精神医療とモニタリング体制の確保に関する研究」

（研究代表者 竹島正）

分担研究報告書

精神医療の提供と地域支援の連携に関する研究

分担研究報告書（2）

### 精神医療と地域支援の連携

研究分担者 高瀬顕功（大正大学社会共生学公共政策学科 専任講師）

#### 研究要旨

本分担研究では、精神保健医療のニーズの満たされていない領域や対象（アンメットニーズ）を明らかにし、地域の生活者支援の取組と精神保健医療の連携モデルを提示することを目的とする。そのため、本年度は、(1)文献レビューによる精神医療アンメットニーズの存在する領域、(2)専門職の事例検討による調査領域、(3)フィージビリティを考慮したうえでの調査対象地域および対象者、について検討を行った。

(1)PubMedを使用し、精神保健、地域福祉の領域から文献レビューを行った結果、海外では精神保健分野における宗教者の役割が一定程度あることが明らかになった。

また、(2)専門職による生活支援の現場からアンメットニーズにつながる事例を検討した結果、精神医療におけるアンメットニーズには支援者の理解が浅いために再生産されるもの、対象者のニーズが満たされずに生じるもの、支援者が対象者のニーズを満たせずに生じるものがあるという作業仮説が導き出された。

これらをふまえ、(3)フィージビリティを考慮したうえでの調査対象地域および対象者について検討した結果、支援の枠組みに当てはまらないアンメットニーズの抽出のため、城北地域での専門支援機関を対象に、精神保健上の課題抱えた被支援者への支援の困難さ、精神科、メンタルヘルスケアの専門家との連携の実態などについて、半構造化インタビューによる調査研究プロトコルが導出された。

#### 【研究協力者】（五十音順）

岡村毅（東京都健康長寿医療センター研究所）

的場由木（自立支援センターふるさとの会）

#### A. 研究目的

生活課題を抱える人の中には適切な精神医療を受けられず、生活課題が複雑化、深

刻化するケースも少なくない。また、医療以外の支援現場で被支援者の精神医療ニーズが見つかることもある。持続可能で良質

かつ適切な精神医療とモニタリング体制の確保には、精神医療と地域支援の連携が必要となる。

そこで、本分担研究では、精神保健医療のニーズの満たされていない領域や対象（アンメットニーズ）を明らかにし、その背景を分析することで、地域の生活者支援の取組と精神医療の連携モデルを提示することを目指す。

## B. 研究方法

2020年度は、研究協力者全員との会議を6回開催した（2020年9月11日、2020年10月2日、2020年10月30日、2020年12月17日、2021年2月5日、2021年3月5日）。そこでは、(1)文献レビューによる精神医療アンメットニーズの存在する領域、(2)専門職の事例検討による調査領域、(3)フイージビリティを考慮したうえでの調査対象地域および対象者について検討を行い、それらにもとづいた研究プロトコルを作成した。

### (倫理面への配慮)

本年度の研究においては、個人情報を取り扱わなかった。

## C. 結果

### (1)文献レビューによる精神医療アンメットニーズの存在する領域の検討

PubMedを使用し、「homeless」「mental health」「prevalence」「unmet needs」「religion」等のキーワードを掛け合わせ、精神保健、地域福祉の領域から文献を渉猟した。その結果、「homeless & "faith based" & "mental health"で検索すると8件、「homeless」 & "religion" & "mental health"で検索すると22件の文献があり、海外では精神保健分野における宗教者の役割が一定

程度あることが明らかになった。

しかし、宗教組織が後景化した日本において、寺院や神社、教会等がアンメットニーズの発見場所となることを積極的に示した研究はなく、専門職による生活支援の現場からアンメットニーズにつながる事例を検討するに至った。

### (2)専門職の事例検討による調査領域の設定

生活困窮者支援、高齢者支援、触法者支援を行う専門家から、過去の事例を紹介してもらい、精神医療ニーズが顕在化しなかった背景について分析を加えた。ヒアリングの概要と議論のまとめは以下の通り。

**事例1）統合失調症かつ認知症の母、統合失調症あるいは発達障害の娘の同居。かつて地域包括に相談にいったが支援につながらず、その後ゴミ屋敷になった。**

- 高齢母は地域包括、娘は保健所が担当部署であり、横の連携がない。地域包括一区役所高齢支援課ー精神保健とつながるのが理想だが、それほど破たんリスクが高いケースでないのにつながらない。「虐待」の分脈だとワンストップでつながるがそれでいいのだろうか。
- 医療保護入院は未だ家族中心であるので、家族がいないケースや、家族が病気のケースだと極端に困難さが増す。
- 何とか医療につなげようと病院に連れて行っても、医療の対象ではないと言われることが多々ある。
- 地域包括は人生の物語の理解という視点がない。一方で、物語として理解して、それを押し付けるリスクもある。しかし、物語を考えて支援するよりも、さっさとケースをこなしていくことが評価されてしまうのが現実。
- ボランティア団体などの「弱い組織」がこのような人を支えやすい面もあるのでは。

**事例2)** 幼少期から発達障害が見過ごされていた男性。バンド活動、薬物使用、収監、心肺停止(高次機能障害?)を経て、よく分からない理由で傷害事件の被疑者となった。

- 司法は入り口支援(裁判の段階でケアプランまで見据える)、出口支援(地域定着など)を始めている。
- 「鑑定」も受けたが、これまでことごとく見逃されてきた人がわかるものだろうか?
- DARC(ダルク)は医療に多くを期待していないとのこと
- 司法が福祉化することは、福祉が司法化することとパラレルであろうが、後者は人権侵害リスク大きいのでは。司法が目指している「切れ目のない支援」「息の長い支援」のうち、後者は危ないのでは。
- 全くエビデンスのない矯正システムを作っていることが理解不能。
- 多職種協働の中でマネジメントができていない。強力な医師がうまくやることもあるが、それが正しいのかはわからない。地域包括や社会福祉士に求められる役割では。

#### まとめ

- アンメットニーズを掘り下げるにあたり、対象者のニーズが満たされていない面と、支援者が対象者のニーズを満たしていない面があるが、混同されている。後者が重要。支援者がきちんと対象者の全体像をみてニーズを満たすことはもっと社会が打ち出してもいいのかも(英国のCare Act 2014ではニーズを満たせ、と明示している)
- 対象者は全く社会に関わっていないのではなく、時々において、瞬間的に面として関わり、むしろ絶望してつながりにくくなっていつている。であれば、その瞬間に全体を把握して対応するケースマネジメントの思想が必要だが、社会に実装されていないのは社会福祉士が醸成されていないことも要因かもしれない。

### (3) フィージビリティを考慮したうえでの調査対象地域および対象者について検討

アンメットニーズを抱える当事者への調査はそのアクセシビリティの面から困難であり、支援現場で専門職が直面する事例から支援の枠組みに当てはまらないアンメットニーズを抽出する方がフィージビリティが高いことが確認された。

また、対象地域は、東京都健康長寿医療センターがある板橋区、大正大学がある豊島区など、機縁法による対象地域設定が調査協力を得られる可能性が高いことから、城北地区を対象とすることを確認した。

### D. 考察

事例検討より、精神医療におけるアンメットニーズには支援者の理解が浅いために再生産されるもの、対象者のニーズが満たされずに生じるもの、支援者が対象者のニーズを満たせずに生じるものがあるという作業仮説が導き出された。

また、アンメットニーズには、まだ存在さえ知られていない、すなわち、支援者がまだ出会ってすらいらないアンメットニーズと、支援の枠組みに当てはまらないアンメットニーズがあることも抽出され、本研究では後者のアンメットニーズに焦点を当て、研究を進めていくこととなった。

### E. 結論

考察で導き出された支援の枠組みに当てはまらないアンメットニーズの抽出のため、城北地域の就労支援ホーム、地域包括支援センター、ボランティアセンター、社会福祉協議会、療養相談室、医療機関、宗教施設(寺院)を対象に、精神保健上の課題抱えた被支援者への支援の困難さ、精神科、メンタルヘルスケアの専門家との連携の実態などについて、半構造化インタビューによる質的調査を行うこととした。

### F. 研究危険情報 なし

### G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

### H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし